

《もくじ》

- 特集・東京電力「西大滝ダム水利権更新」の問題性を問う
2頁・千曲川を危険に陥れた西大滝ダム
……………中沢 勇(正会員)
- 5頁・ダムの大量取水で大河につもる雪
……………小林 幸一(正会員)
- 11頁・より良い川下りもできる21世紀型
観光産業をめざす……………庚 敏久
- 6頁・四万十川の未来をひらく「家地ダム」撤去
……………矢間秀次郎(共同代表)

奔流

題字揮毫・梅原猛

《第3号》

- 発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL 042-381-7770
- 発行人・根津 東六(共同代表)
- 編集人・矢間秀次郎(共同代表)
- 〒振替・00120-0-710488

大河の一滴 (3)

「蛙の川」が突然見られなくなった!

— 用水路が凹形コンクリートで固められて —

加藤 幸子



十五年 鳥が森の中にいるとは考えられない。木
ほど前縁 の間を双眼鏡で探したが、声の主は見つ
あつて北 からない。一体何者だろう、と不思議に
信州の森 思いつけていた。

この謎の解答が閃いたのは、森の小道
を歩いていたときであった。一歩進むたび
に小石を跳ねるように両側の草むらで
何か飛んで、ピシッと音を立てる。立
ち止まってよく見ると、かわいらしい蛙
だった。鮮やかなグリーンの皮膚をした
ものが多いが、褐色のものもいる。こ
の森はアマガエルの楽園でもあったのだ。

ちの大量で埋まっていたのだ。皆いつせいに森を離れてここで集合したらしい。小さな体で跳ねながら同じ方向に進んでいく。車に轢かれた仲間を飛び越えて。蛙の川という表現が浮かんだ。私の足でほぼ二十分の道のりを蛙たちと一緒に水田地帯まで歩いた。田んぼの手前にゆっくりとした流れの用水路がある。底には水草がなびき、ドジョウやタニシが棲んでいる。蛙たちはチャボンチャボンと順々にそこに飛び込んでいった。こここそ森のアマガエルたちの故郷であり、繁殖地なのだった。

の山小屋を持つことができた。初めての夏をそこで過ごしたとき、私は森に住む様々な野鳥たちとの出会いに夢中になった。エナガ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラ、メジロ、アカゲラ、アオゲラなどの留鳥はもとより、繁殖期の夏にだけその森に渡ってくるクロツグミ、キビタキ、アカハラも澄んだ鳴き声を朝夕、樹間に響かせる。沼のほとりでは青い鳥の代表オオルリが歌っている。まさに鳥たちの楽園のような森だった。

数年後、「蛙の川」は突然見られなくなった。森の中で頭上からシャワーのように落ちてきた鳴き声もほとんど消えた。真実はアマガエルにしかわからないが、ちょうどその春、用水路がコンクリートで凹形に固められ、流れが速くなった。水草は生えることができず、ドジョウもタニシもいなくなった。生き物のいないた凄く速さの流水の容れ物になった。今もその傍を通過して万屋さんにゆくけれど、私の胸はキリキリ痛む。

ところがそれらのさえずりをかき消すように上の木からけたたましい音声が降ってくるのに気づいた。鳥たちがひっそりしている昼日中には特に大きく聞こえる。グワッグワッグワッというその声は、オオヨシキリに似ていたが、アシ原の

翌年の夏も私は森にきた。鳥の声も蛙の声もにぎやかだった。ある日食料がなくなったので、歩いて三十分ほどの万屋さんに買いにいくと小屋を出た。森のはずれに近い車道に着いたとき、私は驚いて目を見張った。道がアマガエルの

(第88回芥川賞受賞)

*主な著書に、『夢の壁』新潮社、『長江』新潮社、『私の自然ウォッチング』藤原書店、『池辺の棲家』角川書店など、最新刊に『鳥』に戦争がきた』新潮社があります。